

藤沢
税務署長
賞

聖園女学院中学校 3学年 村田 さくら

忘れられない「あの言葉」

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」この言葉は誰しもが目にしたことがあると思う。

日本は六歳から十五歳までの九年間もの間、教科書が無償で支給されている。しかし、私たちが当たり前だと思っているこの環境は、カンボジアではとても羨ましいものと捉えられている。たとえ教科書を貰えたとしても完全に自分の物になる訳ではなく、学校で何年も使いまわすので、ボロボロになって破けたりしているものが多いようだ。

私の祖母はよく、「自分の身の周りにあるものを当たり前だと思わずに、感謝しながら大切に使いなさいね。」と言う。小さい頃は、学校も病院も教科書もあるのが普通だし当たり前だと思っていたので、意味がよく分かっていなかった。しかしこの「税についての作文」をきっかけに、自分の周りの税について考えてみた。私たちの周りでは税金によって造られている建物が沢山ある。例えば、学校、病院、公園、信号機など。学校に関しては、生徒や先生の私物以外ほとんどが税金によって造られたものである。それなのに感謝の気持ちを持たず、

雑に扱う人がいるのはなぜだろうか。

私が小学生の頃、クラスの男の子たちが教科書を使って遊んでいて、そこに来た先生が激怒したことがあった。それまでは、怒ること自体少なかった先生だったのでもとても驚いたことを覚えている。

「先生が何故こんなに怒っているか分かりますか？大人たちが汗水流して働いてくれたから無償で貰えている教科書を、こんなに粗末に扱っていることに対して怒っているのです。」と、先生は言っていた。そこで男の子たちはもちろん、私を含めてクラスみんなが教科書に対しての見方が変わった。私たちが当たり前に使っている物は全く当たり前ではなく、裏には大人たちの苦勞や努力が隠れていることを心に留めておきたい。

私は来年で中学校を卒業し、高校生になる。高校からは義務教育が無くなり、教科書の裏のあの言葉も無くなるだろう。大人になったら、税金に助けられる側から助ける側になるのだと思うと少しワクワクする。高校生になっても、大人になっても忘れないようにしたい。教科書の裏に小さく、しかし、私たちのために働いてくださった人々の大きい影があるあの言葉を。

藤沢
税務署長
賞

茅ヶ崎市立松林中学校 3学年 中倉 咲和

誰にでもできる社会貢献への道

「税務署とは具体的にどのようなことをしているところなのだろうか。」

中学二年生だった私は考えていた。なぜなら、職業体験で税務署に行くことになったからだ。それまでの私は、税が私達の生活にとって大切なものだと知ってはいたが、はっきり言って、そこまで税に対して関心を持っている訳ではなかった。また、税務署にとっても興味があるという訳でもなかった。しかし、税務署での職業体験を通して、私の税に対する意識は大きく変化することになった。

税務署での職業体験では、税務署の仕事についてだけでなく、「税について」ということ等多くのことを学ぶことができた。

税務署の職員の方の話の中で特に印象に残っているのが、日本の納税制度についてだ。日本の納税制度は大きく分けて二つあるが、その内の一つが「申告納税制度」である。この制度は、所得税や法人税等に適用されており、納める税金の額を国民自らが計算し、申告、納税する制度である。私はこの制度の仕組みを知り、驚いた。なぜなら、自分で申告するという事は、実際に納めなければならない税金の額より少なく申告する。つまり、不正をする人が出てしまうのではないか。と思ったからだ。私自身も買い物をしたときに納める消費税に対して、「消費税がなければもっと安く買えるのに。」と思うこともあった。このように、できれば税金を納めたくない、そう思う人は少なからずいるのでは

ないだろうか。そう思ったのだ。

しかし、税務署では、申告した内容を確認する「税務調査」を行っているため、不正はすぐに告発され、取り締まられるそうだ。

そして何より、日本がこの「申告納税制度」を取り入れているのは、「国民を信頼しているから」だそうだ。そう聞いた途端、私は、はっとさせられた。今までの私は、何を考えていたのだろうか。私達は税によって、豊かな生活を当たり前で過ごすことができている、と言っても過言ではないのに。警察、消防、ゴミ収集等の公共サービス、上下水道設備、道路、学校、病院等の社会資本整備。全て私達の生活に欠かせないものだ。そのための費用としての税を納めることは、当たり前のことではないか。だから納税は国民の義務なのだ。そう深く理解した。税とは、私達の生活を支える「社会共通の会費」のようなものだ。

私は税務署で職業体験をしたことが、税について考えるきっかけとなった。私は将来、社会に貢献できる大人になりたいと考えているが、社会に貢献する道は意外と身近にあった。誰でも社会に貢献できる手段。それが納税だ。そのようにして集められた税が私達の生活を支えている。だから私はもう、納税を嫌だとは思わない。税を納めることこそが日本の社会のために必要であると思うからだ。だからこそ、私はこれから税の集め方や使い道に関心を持ち、自分でも考えていきたい。